

公共空間の活用と 賑わいまちづくり

オープンカフェ／朝市／屋台／イベント

(財)都市づくりパブリックデザインセンター 編著 篠原修・北原理雄・加藤源 他 著



実現のための手引き

現行制度でも可能な手法、運用の基本的事項を網羅
実践のためのポイントとプロセスを全国26事例に学ぶ

関連年表・法令集付き

学芸出版社

地元企業が主体となった遊覧船運航

——富山市・松川遊覧船

編集委員会

- ◆中心市街地を流れる河川における遊覧船やディナークルーズの運行
- ◆地域が一体となった川を活かした観光振興の取り組みの展開
- ◆県内企業からの出資により遊覧船運行(株)を設立

1 取り組みの背景

●松川の概要と遊覧船運行までの経緯

富山のまちは、かつてまちの中心を流れていた大河・神通川の度重なる洪水に苦しめられてきた。その対策として、1901（明治34）年より大正期にかけて、富山城の北側を湾曲して流れる神通川にバイパスをつくる工事（はせごし 馳越線工事）が行われ、川の流れの移しかえが行われた。かつての河道の大半は埋め立てられ新たな市街地がつけられたが、かつての河道のうち右岸側約20mは部分的に残された。これが今の松川であり、神通川のかつての川筋を今に伝える、いわば「なごりの川」といえる。

昭和40年代～50年代、松川の水質は汚濁が進み、また治安上の問題も取りざたされるなかで、松川を埋め立てて駐車場を整備する計画が浮上した。しかし、こうした動きに対して松川の保存・活用が議論されるようになる。そうした中で、「北前舟が行き交ったかつての神通川の賑わいをもう一度」と遊覧船運航の企画が生まれた。

遊覧船運航を企画したのは、富山市でタウン誌などを発行する(株)グッドラックの代表取締役の中村孝一氏。

「魅力ある富山をつくる」と題したタウン誌上での座談会をきっかけに、富山の魅力を探求して中村氏が行き着いたテーマこそ、富山の「水」との深いつきあいの歴史であった。「水の都・富山」を目指す上で中村氏がイメージしたのはゴンドラの行き交うベニス^①の街。「東洋のベニス」になるという大きな夢に向け、かつての神通川のなごりである松川での船遊びというアイデアが生まれたのである。

マスコミへのPR、市内の経済人や県・市への働きかけ、

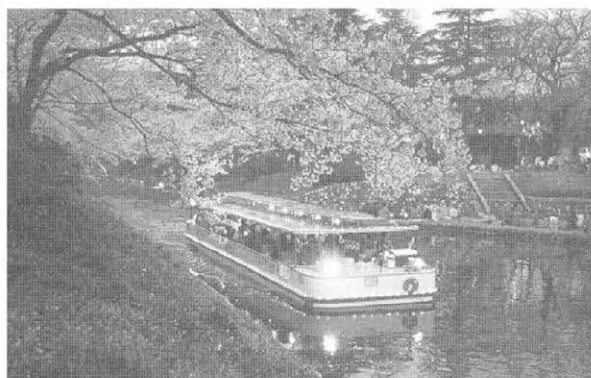


図2 ディナークルーズ



図1 位置図

項目	概要	
概要	年度	・1988年～
	利用施設	・市中心部を流れる松川（県管理） ・幅員約20m
	利用内容	・遊覧船、ディナークルーズ等の運航
	期間、時間、頻度	・年間を通して随時運行
実施体制	実施主体	・富山観光遊覧船(株)
	許可申請	
	設備の調達・設置 日常管理・運営	
許可関連	必要な許可	・河川使用許可（富山県）
	収益の扱い	・運行経費等に充てる
	許認可官署からの提示条件内容	・洪水時の対策

各地への視察など精力的な活動を行うなか、1987年9月に県内企業8社から出資を受け「富山観光遊覧船(株)」を発足。遊覧船運航にあたっての県との協議は、「前例のない取り組み」ということで時間を要したものの、富山の発展につながる「夢」のある取り組みに賛同する熱意のある県職員の協力・支援によって、河川使用が許可され、提案からあしかけ4年、1988年4月より遊覧船の運航が開始された。

●松川の水質改善と遊歩道整備

松川は一級河川神通川の支川であり、管理は富山県である。川の両岸には1950～1953年に桜が植えられたが、前述の通り昭和40～50年代までにその水質は悪化の一途をたどる。こうした状況に対する官民が一体となった松川の保存・活用の動きのなかで、松川に土川から浄化用水を取り入れるための可動堰と取水門の建設(国)、松川の浚渫(遊覧船会社、県土木事務所)や、土川取水門のゴミ取り機の設置(国)、周辺の遊歩道の整備(県)などが昭和50年代に行われた。夜にボンボリが灯る遊歩道は「松川べり彫刻公園」として整備され、地元富山県の彫刻家の作品28点が展示されている。現在、改修と浄化が進んだ松川には悠々と錦鯉が泳ぐ姿も見られ、川面に映える春の桜、夏の新緑、秋の紅葉、冬の雪景色を堪能できる色合い豊かな水辺となっている。1992年の春には、遊覧船発着所となる松川茶屋が整備され、2005年4月には松川茶屋と松川を一体化する修景護岸が完成。土手を階段式にすることにより、店内からも松川の水面や遊覧船の行き交う様子が見られるようになっている。

2 遊覧船運航の概要

●遊覧船運行の概要

遊覧船の運航は「富山観光遊覧船(株)」が行い、富山市安野屋地内の松川橋からいち川合流点の桜橋までの約1km。10人乗りの屋形船5艘と51人乗りの大型船1艘を所有し、遊覧船運航を行うほか、遊覧船発着場所となる「松川茶屋」の運営もあわせて行っている。基本コースである七橋巡りは往復2.4kmのコースで所要時間は30～40分。10人乗りの屋形船は予約制で、大人3名より運航を行っている。屋形船による七橋巡りのほか、定員51人の大型船によるディナークルーズ(午後6時30分～8時)も行われており、春にはお花見宴会船、夏には納



図3 松川茶屋のカフェテラス(遊覧船会社HP)

涼ビア宴会船として運航されている。

●リバーフェスタの開催

また、2003年9月には、神通川の馳越線工事完成100年に合わせ、市民有志がリバーフェスタを5日間開催した。水上リバーパレードや川べりの空間を使ったライブ、絵画展、散策ツアーなど、川をテーマとした様々なイベントが行われ、以降、毎年8月の恒例行事となっている。

3 今後に向けて

●観光資源としての定着

堀割構造であることや沿川の桜並木により、遊覧船からは、街路沿いの車や騒音が気にならず、乗客は静かでゆったりとした時間を過ごすことができる。今では、年間約1万人が利用する観光資源となっている。

●地域が一体となった松川を活かしたまちづくりの展開

松川一帯では県、市、民間事業者が協力し、松川の清掃活動を実施するなど、地域協同の取り組みが始まっている。特に、遊覧船の運航も含め、地元企業が社会奉仕活動の一環として松川をいかした富山の魅力づくりに向けた取り組みに協力している点が大きな特徴である。

また、近年、市民団体の「松川を美しくする会」が設立され、松川の水位一定化、水質改善に向けた取り組みのほか、松川を核とした地域活性化に向けたアイデアが次々と生まれている。

※本項の執筆に際し、富山観光遊覧船(株)中村孝一氏のご協力を得た。